

持続可能な循環型社会を実現するカギは「テクノロジーの追求」にある

～「質主量従思想」につながる環境調和型経営～



取締役社長

田崎 雅元

カギになる「自然に還す技術」 「自然の恵みを活かす技術」

環境問題の深刻化に伴い、従来のような資源やエネルギーを大量に消費する社会に疑問が寄せられています。環境のためだけなら江戸時代のような暮らしが理想かもしれませんが、世の中には、あまりモノがなくても幸せだという人がいれば、もっとモノの豊かさを享受したいという人もいます。こうした多様な価値観にミニマムな資源で応えることこそ、モノづくりを行う企業の使命であると考えています。

まず、資源から製品を生み出すだけでなく、「不要になったモノを回収して自然に還す」ことも重要になってくるでしょう。当社では、廃棄物処理施設や下水汚泥処理装置など静脈産業としての製品も製造していますが、リサイクルコストをどうシェアするかが一つのポイントとなっています。それは動脈産業と違い表面上の製品価値ではコストの回収が困難だからです。「廃棄にもコストがかかる」ことは、皆が認識しておかねばならない点です。企業としては、製作、施工から使用はもちろん解体、廃棄まで「ライフサイクルを包括して環境に配慮したモノづくり」を心掛けねばならないと考えています。

次に、エネルギーをどうまかなうかも課題です。リサイクルにもエネルギーは投入されます。残り少ない化石燃料に代わる新エネルギーの開発も急務です。

特に大きな期待が寄せられているのは、太陽エネルギーです。石油も風力も、元をたどれば太陽です。無尽蔵ともいえる自然エネルギーを役立てることが環境問題のカギになる、と思います。当社でも風力発電やバイオマス、ソーラー

システムなどの技術開発に力を入れていますし、新技術の創出と同時に、鉄道車両や船舶などの従来型製品に対しても重量軽減や燃費向上を図りながら、CO₂の大幅な削減を果たしています。

資源の乏しい日本だからこそ、「自然の恵みを活かす技術」で世界をリードしていくべきで、当社もここで総合技術力を発揮したいと思っています。

品質と環境は車の両輪

環境と事業の成長は二律背反する面もありますが、それを両立させるのは技術にほかなりません。本年度に策定した『中長期環境ビジョン』では、技術面での努力で実現可能な数値目標を掲げています。また収益性についても「環境調和型経営」という指針を打ち出しています。

今後、環境規制は世界的な規模で更に厳しくなっていくでしょう。コンプライアンス（法令遵守）を企業文化として定着させることはもちろん、製品の開発にあたっては、将来、規制の対象になる可能性（リスク）を含めた「予見」も必要となります。従来から当社が実践してきたQ（品質）C（コスト）D（デリバリー）に、E（環境）の要素が加わってくるわけです。

ハードルがより高くなりますが、私は「品質と環境は車の両輪」という意識で問題に取り組むことが重要だと考えます。また、このことは社長就任以来、「量的な拡大よりも、技術とブランド力で差別化された付加価値の高い製品やサービス」にこだわり、「質主量従型経営」を掲げてきた私の方針に通じています。

技術革新こそが夢をもたらす

“地球号”の運転手は大量生産・大量消費というアクセルを踏み続け、ハンドルさばきだけで諸問題をかわそうとしてきましたが、ようやく今「安全運転には環境というブレーキが大きな役割を果たす」と気付いたところ です。人々が自然の恩恵を分かち合い、豊かでバランスの取れた社会を取り戻すために我々ができること——それはエネルギー関連技術の革新であると確信しています。

「Kawasakiの技術で可能にしてみせる」というチャレンジ精神を持ち続けることが大切であると思います。社員全員が「着眼大局、着手小局=Think Globally, Act locally」を実行し、“地球号の持続可能な安全運転”のサポーターになってもらい、美しい地球の未来に貢献してほしいと願っています。



車両カンパニー

ライフサイクルエネルギーの削減と環境調和型経営の推進

車両カンパニーは、社会基盤と密接に関わりあっています。すなわち、インフラ構築時には建設機械を、運用時には輸送の主要機関としての鉄道車両を、そして回収時には破砕機というように、インフラのライフサイクルのあらゆる段階で当カンパニーの製品が活用されます。

それゆえ、環境に対する負荷を低減するためには、インフラのライフサイクルエネルギーを削減させなければなりません。

一例として、新幹線700系の生涯走行エネルギーは、初代の新幹線に比べ約2/3しかかからないというユーザー殿の報告もあります。また、建設機械の製品アセスメント実施率は75%であり、これに基づいた低排ガスエンジンの搭載率は95%に達しています。さらに、インフラ回収後発生したプラスチック類は、RPFとしてリユースされるプラントにも取り組んでいます。

このように、インフラのライフサイクルエネルギーを削減させる製品の開発と製造を通じて環境調和型経営を確立し、環境にやさしい循環型社会の構築を今後も一層推進します。



プレジデント 大橋 忠晴

航空宇宙カンパニー

環境保全と環境調和型経営の確立を目指して

航空宇宙カンパニーはISO14001認証取得後2年目に入りました。課題は多岐にわたりますが、重要課題の一つは地域社会を含めた環境保全対策です。岐阜工場は周辺を市街地に囲まれており、また地下水脈や河川下流には飲用水の水源があるため、大気質、水質の維持管理には細心の注意を払っています。そのような中で、今後は有害物質の代替材検討など、さらなる環境保全に継続的に取り組んでいきます。

次に製品開発の分野では3年計画で製品アセスメントの実行を目指します。従来からLCA手法の適用を検討してきましたが、今年度はワーキンググループ活動を本格化し、その試行を開始します。

環境保全と環境調和型経営の確立を目指し、全従業員が一丸となり、さらなる努力を払う所存です。



プレジデント 須郷 隆

ガスタービン・機械カンパニー

品質と環境を考慮した製品で社会貢献

近年品質や環境に対する社会の目は厳しく、地球温暖化対策の推進に関する法律など法規制も強化されています。

当カンパニーでは、小型大出力のガスタービンエンジン、エネルギーの総合効率が極めて高いコージェネレーションシステム、トンネル換気設備等の環境保全に貢献する製品を手がけ、いずれも高い評価を得ていますが、さらに「環境に優しい生産工場・製品作りを目指して活動する」との環境方針を定め、合理化・省力化した生産体制、埋め立て廃棄物をゼロにするゼロエミッション活動およびライフサイクルを考慮した製品アセスメントの実施等の活動を推進してきました。

今後も「持続可能な循環型社会の実現に貢献する」ために資源の有効活用および製品品質と環境を考慮した新製品の開発等を行い、環境調和型経営活動を実践し、顧客、地域および社会に貢献していきます。



プレジデント 吉野 隆

プラント・環境・鉄構カンパニー

環境負荷低減のあらゆる要望に技術で応えます

当カンパニーはあらゆる面で地球環境を守ることに貢献できるモノ作りに関わっているといっても過言ではありません。

「環境ビジネスセンター」は、ゴミ焼却炉、産業廃棄物のリサイクル装置、下水処理装置等を中心とする「環境保全に必要な装置・システム」そのものの設計製作を事業内容としています。また、「プラントビジネスセンター」では、製紙、製鉄、セメント等の製造プロセスにおいて放出される熱エネルギーを蒸気や電気の形に変える廃熱回収ボイラや、火力発電所からのSOx、NOxの排出を抑える脱硫、脱硝設備、あるいは省エネを追求したセメント装置等を主力製品としています。

さらに「鉄構ビジネスセンター」では、自然の力である風を利用する風力発電や、よりクリーンなエネルギー源であるLNG関連設備を手掛けています。今後一層これらの製品の開発・改良に努めると共に、すべての製品の省エネ化を推進し、地球環境を守る一翼を担っていきたくと考えています。



プレジデント 前田 卓也

汎用機カンパニー

地球にやさしい製品づくりを最重要課題に

当カンパニーは二輪車、四輪バギー車(ATV)等レジャー製品を提供しています。これらの製品は生活に豊かさをもたらす一方、地球環境にさまざまな負荷を与えてきました。私たちはこの負荷をできる限り低減すべく、当社の技術力を結集し、燃費の向上、排気ガスのクリーン化、環境負荷物質の削減、またリサイクルの仕組み作り日々取り組んでいます。

パーソナルウォータークラフトは4ストロークエンジンを搭載することにより、排気ガスのクリーン度を著しく向上させ、騒音の軽減にも成功しました。二輪車では欧州の第三次排ガス規制(EURO III)をクリアするクリーンエンジンの開発を進めています。ISO14001活動の堅実な実施による生産活動そのものの環境負荷低減とともに、こうした「地球にやさしい製品づくり」は、当カンパニーの経営にとって最重要課題であると考えています。



プレジデント 森田 進一

(株)川崎造船

さらなる環境調和型経営活動を目指して

昨年10月に分社独立した当社は川重グループの基幹部門としての自負を持ち、持続可能な循環型社会の実現に貢献するというグループの環境基本理念に沿って、船造りという当社の事業を展開してまいります。

当社は環境にやさしいクリーンエネルギーを運ぶLNG船、LPG船の建造に重点を置いており、本年度からは坂出工場で世界最大容量のLNG船と、画期的な省エネ船型を採用したLPG船の連続建造が実現する運びとなりました。

環境にやさしい建造方法、すなわち省資源、省エネで効率的に船を造るよう努力を続けています。昨年は当社神戸工場でもISO14001を取得しましたが、今後は神戸・坂出両工場を中心にすべての部門・段階で環境管理システムの継続的改善を円滑に実施すると共に、地域や家庭の環境保全にも配慮するよう各従業員に呼びかけ、従来にも増して地球全体の環境を重視した環境調和型経営活動を推進致します。



社長 田所 修一